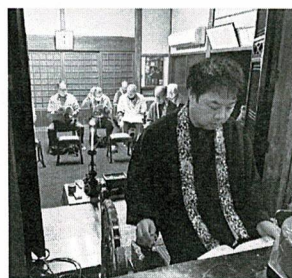


ともしび

お浄土に帰(還)る

井上直之
(釋直道)

茨城県牛久市に知的能力に制約がある十五歳から二十才未満の少年が入所している茨城農芸学院という少年院があります。

私は、祖母のなくなった二十八年からこの施設の講師(教師)をさせていただいており、今夏は施設の敷地で育てたワイン造りに必要なブドウ収穫を体験しました。少年たちも汗をかきながら一生懸命収穫していました。

この施設には親から必要とされていない少年が多くいます。社会に出て孤立し、孤独になります。「被害者のことを考えれば加害者が一生苦しむのは当たり前だ」というご意見はごもっともですが、生まれたときからろくに「飯も与えられず」「少年院は毎日三食ご飯があつて嬉しい」と話す少年が何人もおり、それを聞くたびに私は胸が苦しくなります。

茨城農芸学院では、恵まれない環境で育てられたにも関わらず大半の子どもたちが更生しようと毎

日頑張っています。

今年彼らが収穫したブドウは、「牛久シャトー」という名前で来春販売される予定なので、気になる方は是非調べてみてください。

さて、先日お寺にある白木位牌を見て思ったことがあります。

お亡くなりになった方の日付には「没」や「寂」等の漢字がついています。本位牌には付けないことが多いようですし、浄土真宗は過去帳のみなのであまり気にならなかった方もいらっしゃるかもしれません。

「没」はなくなったという意味で、「寂」は迷いの世界を離れがた寂滅の寂です。

しかし、昔の宗願寺のお位牌を見ると「皈」が多く使われており、音読みで「き」、帰(還)るという意味があります。

その文字を見て私は「お浄土に行(往)く」より「お浄土に帰(還)る」と言われた方が安心す

ることに気づきました。

先月、京都の御本山で仕事があり、先生方との話し合いがありました。初対面だったこともあり、神経を使ったので、自宅に帰ってホッとしました。帰る場所があるのは幸せなことです。

ただ、京都から古河駅に着き、自分で歩いて家に帰ることはできませんが、お浄土には自分で帰ることができません。道が分からないからです。

親鸞聖人は、だからこそ「我々は娑婆の縁が尽きたとき自分の力ではなく仏さまのおはたらきで浄土に参る」とおっしゃいました。

正直、それでもこの命が尽きるの嫌だと考える私たちですが、天国、地獄、閻魔さまの世界ではなく私たちには「お浄土に帰(還)る」という尊い教えがあるのです。

今年の報恩講は「重誓偈作法」と「正信念仏偈」のお勤めをさせていただきます。(写真・仏壮と練習中)

「重誓偈」には、後に仏となる菩薩がすべての人を救うという誓いが説かれており「正信念仏偈」には親鸞聖人が選定された七人の高僧(七高僧)の徳が讃えられております。

親鸞聖人を偲び、精一杯お勤めさせていただきます。(住職)

仏教壮年会

第2土曜日 午後6時

仏教婦人会

16日 午後1時半

壮年会より

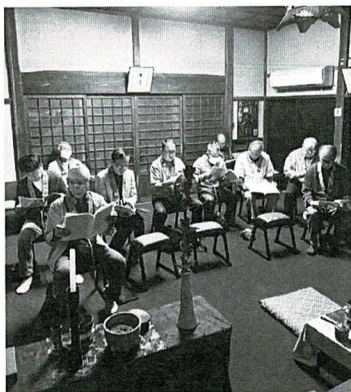
福島 慶久

十月二日秋晴れの中、私が茨城西組の代表として理事を務めている、東京教区の仏教壮年会連盟の研修会に、住職を含む六名で参加しました。

県内の御旧跡、大覚寺と西念寺を参拝し、笠間市内の造り酒屋で利き酒を体験しました。

人気ランキングでは常に下位が定位の茨城県ですが、宣伝されていない良い所がたくさんあるのだと感じました。

宗願寺合唱団の活動終了に伴い、壮年会が音楽法要の中心を勤めることとなりました。服部夢仁先生にピアノ伴奏をお願いし、住職の指導のもと、今回の報恩講から歌うことになりました。定例会前の時間に、仏教讃歌の練習をしています。



本堂にて

各種研修会への参加、子ども会や清掃等への奉仕活動、親睦を深めるための飲み会等、参加することでお寺との絆が深まることを願っています。

皆さまのご参加をお待ちしています。(仏教壮年会会長)

婦人会より

嘉神佐智子

報恩講のお齋について副住職と相談しながら、今年はギンナンの収穫が遅れていることに気づきました。お弁当の真ん中に入る「がんもどき」に入れる大切な食材です。お寺のギンナンであることに意味があります。

行事のお弁当作り、子ども会のお手伝い、教区や組の研修会への参加等、長い間活動を続けてきましたが、コロナ後参加者が減って寂しくなりました。

十一月四日、茨城西組の「女性の集い」がここ宗願寺で開催されます。寺族女性連盟との共催で横浜のお寺の坊主・浦上智照さん(プロの女優さん)がおてらしばい「愛しき娘みずぎ」を演じてくださいます。詩人金子みすゞについてのお芝居です。婦人会の会員でなくても、関心をお持ちの方はお寺までお電話ください。

成道会バザーは、食品については予約をしていただきます。申込用紙はお寺にあります。私たちが作れる量に限りがあることと、フードロスを減らすためです。バザーへの品物は十一月末締め切り、集会所で受け取ります。

婦人会では、新しいお仲間を募集しています。お寺を楽しい所にしたと思っています。よろしくお願いたします。(仏教婦人会会長)

彩^さ弥^やと弥^み那^なとの日々

井上明寿子(釋妙寿)

八月のお盆前、夏休みのご縁作りとして、子ども向けにお線香作りを行いました。

初めての試みで手探りでしたが、彩弥も弥那も準備を手伝ってくれたり、法要できちんと話を聞くことができ、成長を感じる一日となりました。

また、お手伝いのご門徒さんたちも一緒に線香作りをしたり、壮年会が用意してくれたゲームも盛りあがって和やかな会となりました。

お昼は副住職と婦人会お手製の特製オムライス弁当です。鮮やかな色合いに歓声があがり、皆さん美味しいと好評でした。

お線香を作るときは本来粘土状にした香料を機械で圧縮して細長くするのですが、今回は手作業なので自由に作ってもらいました。

コーン型を中心に、長いお線香に挑戦する子や、なくなつたお父さんが大切にしていたゲーム機を形にする子など、一人ひとり思い入れのある素敵な作品ができました。作品はお土産に持ち帰っていただきましたが、お盆になるとお墓参りで持ってきた方がたくさんいて、私も心が温かくなりました。

お釈迦さまも瞑想の際にお香を使ったり、弟子が亡くなったときに香木で供養したり、またお釈迦さまご自身の火葬の際にも香木が使われたと言われています。

良い香りは仏さまのご馳走とされていますが、私たちの心にもご馳走なのかもしれません。有難い一日を過ごさせていただきました。(坊守)



8月8日 集会所にて

私を育ててくださる方々

井上由美子(釋由真)

お寺のホームページを開くと、彩弥と弥那のピアノ合奏「思い出(久しき昔)」を聞くことができます。♪垣に赤い花さく、いつかのあの家♪ 八月の、全戦没者追悼法要の後の納涼会、壮年会の皆さんの前で演奏したものです。

この曲は、小学生の私が仲良しのみっちゃんと呼ぶ毎日二人で練習して、皆の前で歌った思い出の曲です。学習発表会だったような記憶があります。みっちゃんが主旋律を歌い、私がハーモニーをつけた。母に褒めてもらったこと、ブランコに腰かけて、練習した夕暮れをはっきりと覚えています。

仏山の皆さんとともに、板敷山大覚寺さまへお参りすることができました。母と仲良しだった前坊守が往生されたのがコロナ禍だったため、お参りできなかったことがずっと気になっていました。自然体で穏やかな花子さまの、温かな笑顔を思い出しています。御本山の御正忌報恩講にご一緒した時の、楽しかった二日間が忘れられません。

いちばんに思い出されるのは、父が亡くなったとき駆けつけてくださったお赤飯をお供えしてくださったことです。人の死にお赤飯なんて非常識……と思われる方もあることでしょう。けれど、それは仏となったことを喜ぶ、という尊い意味があるのです。

大切な方の死が悲しいのは自然な感情で、仏さまになれて良かった、と頭で考えても泣いてしまいます。生まれたら死ぬのは自然なこと、死は決して「ご不幸」ではありません。

浄土真宗が盛んなある地域では、ご葬儀のときにお赤飯とからし汁をいただくそうです。成仏して初めてたいからお赤飯。でも、からし汁が目に入ると……と涙する、面白いなあと思いつつながら法話を聞いたことをしみじみと思ひ出すことです。

板敷花子さまは、私にとって大切な善智識のおひとりです。

本願寺出版社から発行されている「大乘」に門徒推進員の平野正子さんの文章が掲載されましたので、皆さまもお読みください。

「ご機言! お寺の掲示板」は「自分のサイズで生きる」ということばでした。

思い起こしてみれば、社会の第一線で働いていたとき、「自分はこうあるべき」「自分はこうでなければならぬ」と常に自分をしつかりと縛ってしまいましたが、男女差別のあった時代なので、涙した日々は数え切れません。

70歳も半ばになると「我」が弱まり、みんなと楽しい時間を一日でも多く、楽しく、つつがなく過ごせる自分になってきたと思います。

若い頃から、「自分サイズ」で生きていたら涙する日々は少なかったと思います。

仏法に出遇ったことでそれまで握りしめていた価値観が変化することを教えていただきました。私に関わる全ての方々に感謝の思いでいっぱいです。(副住職)

成道会法要・バザー

12月7日(日) 午前11時半

修正会

1月1日(木) 午前10時

御正忌報恩講・新年会

1月11日(日) 午前11時

立春拝賀式・仏婦新年会

2月4日(水) 午前11時

永代経

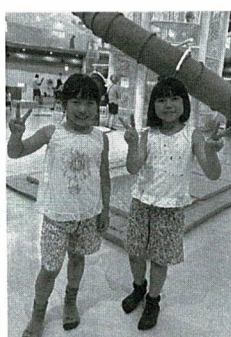
3月1日(日) 午前10時半

編集後記

両膝の痛みがなくなり、楽しく報恩講の準備ができることが嬉しいです。明日からギンナンを剥きましょう。

朝七時から夜十時まで、ほとんど集会所にいて留守番と電話番をしていることが多いです。本堂の裏や自分の部屋にしていると「お留守だったの」と言われてしまいます。テレビを観ながらパソコンで仕事をするか、ケーキを焼いたり保存食作り等をしていきます。生きるというのは大変で、私にも人間関係の悩みやお金の悩み他様々あり、特に自死に関わる問題では泥水を飲んだような辛い思いを抱え込むこともあります。誰にも話すことはできません。

元気になるうと、ささやかな喜びを見つながらの日暮らしですが、住職の娘たちと過ごすことが楽しくて、感謝です。 合掌



いちばんの癒しです 彩弥(右) 弥那(左)

宗願寺ホームページ



宗願寺ウェブサイトURL
https://souganji.com/

発行・宗願寺門信徒会
編集責任者・井上由美子
(印刷所・阿部印刷)